

氏名	み　　うら　　かなめ 三　　浦　　要
学位(専攻分野)	博　士(文　学)
学位記番号	論　文　博　第　479　号
学位授与の日付	平　成　17　年　3　月　23　日
学位授与の要件	学　位　規　則　第　4　条　第　2　項　該　当
学位論文題目	真理の「ところ」と探究の道

——パルメニデスにおける哲学的探究をめぐって——

論文調査委員 (主査) 教授 内山勝利 助教授 中畑正志 教授 伊藤邦武

論　文　内　容　の　要　旨

「ソクラテス以前哲学者」の中でもその思想の独自性と影響力の大きさにおいて際立った存在であるエレア派のパルメニデス(前5世紀前半)は、伝統的な叙述形式である六脚韻の叙事詩形式を借りてその思索を表明した。全体で約500行を数えるとも言われているこの詩のうち、現在われわれが実際に読むことのできるのは、160行ほどの断片化した詩行にすぎない。名もなき女神が若者であるパルメニデスに語りかけるという形式をとるその詩は、三部構成で、乙女子たちの操る馬車に乗った若者とその女神の館へと赴く道行きを描く序歌、「あるもの」の本性を導出してみせる真理の部、そして死すべき者たちによって構成された宇宙論を含む自然学説の描出としての「思わく」の部の三部から成る。ほんの200行足らずの詩行しか残っていないにもかかわらず、「その言葉の本来の意味における最初の哲学者」(A. P. D. Mourelatos)であり、「第一級の哲学のパイオニア」(G. E. R. Owen)であると評される彼の思索の独自性とその射程を、特に彼が示した哲学的探究の方法という観点から、可能な限り明らかにしていくのが、本論の目的である。

論者は、まず序章で詩の序歌において示される探究のプログラムを検討する。そこでは、真理を探究せんとする若者が、「まずは真理の心を」、そしてそのみならず「まことの証しなき死すべき者たちの「思わく」をも」、そしてさらには、思わくされることが持つ真実性と内的必然性の依ってきたる所以をも学ぶように女神から求められている。しかも、真理と「思わく」は受動的な学びの対象であるのに対して、「思わく」の真実性と内的必然性については能動的な学びが要請されている。つまり「思わく」の学びには二重の意味があり、ひとつは、虚偽性を吟味することなく「思わく」の自然学説や宇宙論をありのまま聞き学ぶこと、そしていまひとつは、真理に関する言説を導きの糸として、聞き取った「思わく」を吟味批判し、その虚偽性、相対的な真実性の由来を、自ら学び取ることである。したがって、論者によれば、後者の学びは、実在についての規定を満たしうる新たな宇宙論へと展開していく方向性を持つものである。

第1章では、論者は、そのプログラムの最初に示されていた学びの対象としての「真理のところ」たる〈ある〉ということについて、その中心的な意味は何であり、その主語は何かというきわめて基本的な、しかし研究者の間でいまだに見解の一致を見ることのない困難な問題を改めて検討する。女神は探究の道として〈ある〉の道と〈あらぬ〉の道を提示する。そこで、論者は、まず「ある」の意味について、これを述定とは見ないし、真実述定ともせず、むしろ、「存在」と解する。したがって、どのような対象であれ、〈あらぬ〉の道を探るとき、それはその対象の不在と非有を一方向的に主張するものであり、知識を与える以前に探究そのものを不可能にする。真理の探究は「ある」という形しか取らざるをえない。そしてこの道に沿って探究を進めるとき、まず必要とされるのが「ある」の本性の理解であり、死すべき者どもが無批判的に探究対象の存在を前提としていることに反省を促し、根源的な〈ある〉に立ち帰ることを求めている。パルメニデスにとって何よりもまず問題とされるのは、何があるか、ではなく、あるとは何かということである。したがって、論者によれば、主語についても具体的個別的な存在者を想定するのではなく、むしろ、それは絶対的用法として特定主語を持っていないものとされる。主語の措定は、「ある」の本性の開示終了後の課題となるべきことである。

第2章では、断片7における「ロゴス」の意味を検討することを通じて、〈ある〉ということと、感覚、思惟、言説(口

ゴス)との関係を考察し、またロゴスを基準とする思わくの判定が真理探究とどのような関係にあるのかという点が明らかにされる。論者は、「ロゴス」が感覚と対立する知性的能力ではないことを強調する。ここでは、女神が語った多くの異論をひきおこすエレンコス「ロゴスで判定せよ」と言われているが、エレンコスとは吟味批判であり、具体的には女神が死すべき者たちの見解を分析して取り出した思考形式としての「〈ある〉と〈あらぬ〉は同じであり同じでない」の妥当性を吟味検討することである。論者によれば、このような作業に知性が感覚と対立しながら携わっていることを示唆するテキストはない。パルメニデスにおいては、知性は感覚より遙かに優れた能力であるとする見方はなく、逆に知性も過ちうるものであり、それは常に必然的に〈ある〉を誤りなく捉える能力ではない。むしろ、パルメニデスによってなされているのは総体的な認識能力に対する批判であり、知覚経験と悪しき慣習にとらわれると、知性も感覚もともに過つことを、論者はテキストから引き出している。それを然るべき方向へと導くのが、女神の「言葉(ロゴス)」、すなわち自明の、証明を必要としない探究の原理、「〈ある〉、そして〈あらぬ〉はあらぬ」という原理である。そして、この〈ある〉こそが人間の思惟と言説の成立を保証する原因であり条件である、とされる。

第3章では、探究の道として提示されているものがいくつあるのか、そしてそれぞれはどのような関係にあるのかという問題が論じられる。すなわち、論者は、断片2において〈ある〉の道と〈あらぬ〉の道がまずもって探究の道として提示されていたが、断片6あるいは7では第三の道、すなわち「思わく」の道への言及が見られることに注目する。これは、〈あらぬ〉の道と同一なのか、それとも文字通り第三の道なのか。〈ある〉の道の提示に際して、考えられる唯一の探究の道は二つのみ、と言われていたことからすれば、第三の道はありえないと思われるが、しかし同じくテキストからは第三の道の存在が明らかである。論者は、これが第二の道、すなわち〈あらぬ〉の道の変形とは考えず、やはり第三の道とみる。それは「〈ある〉と〈あらぬ〉は同じであり同じでない」とする死すべき者どもの道である。ただしこの矛盾律違反の言明は、彼らの意識的、自覚的な言明ではなく、女神による「思わく」分析の結果としての裁定である。彼らは彼らなりに〈ある〉と〈あらぬ〉を使い分け、〈あらぬ〉を排除していたのだが、同時に生成や変化を語ることによって、〈ある〉を〈あらぬ〉に結びつける結果となり、矛盾を犯してしまっている。したがって、彼らの歩む道は、論理的思考の道とは次元が異なったもの、〈ある〉の道とも〈あらぬ〉の道とも存在の位相を異にするものであり、彼らは〈ある〉と〈あらぬ〉のいずれの本性も理解していない以上、いずれの道にもコミットしてはいない、というのが論者の認定である。

第4章では、断片8に展開された「あるもの」の本性開示のうち、特に第一番目に言及され、その他の本性規定の論拠となる不生不滅という本性に焦点を当てる。(1)「生成しえず、消滅しえない」、(2)「全体としてあり、ただ一種のもの」、(3)「揺るぎえない」、(4)「無窮である」という四つの本性規定が、〈ある〉の道の「しるし」として示され、(4)以外の規定がそのあとに続いて論証されていく。これらの論証においては、「あるもの」を主語として議論が進められるが、さきに論者の確認したところによれば、それは、「ある」の主語の位置に来る実体ではなく、まさに「ある」ということを名詞化した表現であり、主眼は、あくまでも「ある」ということの本性の提示にある。これらのうち、(1)の不生不滅論証では、「あるもの」の「あらぬもの」からの生成が不可能であることが、まず「あらぬもの」の言表と思惟の不可能性、生成における充足理由の欠如、そして、そもそも無から無への成り行きに他ならない生成という事象の持つ矛盾から、論証される。次に時間の観点が導入され、「あらぬもの」から「あるもの」が未来あるいは過去のある時点で生成することの不可能性が示され、こうして不生論証が完成する。消滅論証は直接行われていないが、無から無へと移行する生成とは、起点を強調すれば生成だが終点を強調すれば消滅になる。したがって、そのような生成が否定されるということは、消滅も同時に否定されることになる、と論者は考えている。こうして「あるもの」の過去と未来における生成消滅が否定されると、その時間的不変性・同一性が確保される。「あるもの」は時制の変化すら受け入れることはない。それが受ける限定とは内的な自己規定より他にない以上、外的な限界づけは消滅し、無始無終となり、それは無際限なものとなる。そして時間の区別が無効になるとき持続は意味を失い、「あるもの」は無限となり、無時間的でありうる。かくして、彼の「ある」は限りなく無時間という概念に接近している、とされる。

第5章では、先の本性規定の(2)から導き出されうる「一」という特性に関して考察している。それはパルメニデスを一元論者と認定する根拠となりうるかどうか、論者の議論の主眼点である。しかし、その論証を厳密にたどれば、(2)が数的一元論の想定するような、複数性を否定する意味での「唯一性」を表しているのではなく、「ある」ということが自らにおい

て異種的分立を許容しないという意味での「ただ一種」なのであり、またこの点を敷衍する「一挙に全体として一つのもの、連続するものとしてある」という説明も、本性の上で、「ある」が異質な諸部分に分かたれることなく全体として連続しているということを述べたものである、と論者は結論している。また、その他の本性規定の論証でも、空間的イメージを与え、単一の物質的充実体の存在を示唆しているかに見える箇所もあるが、空間は本質的な議論の枠組みとはなっていない以上、空間的表象は類比的表現、比喩にすぎないとされる。結局、「一」という特性が他の本性規定より優越的地位を占めているとは言えず、それは常に同一性や均一性という意味での「一」なのであり、それゆえ、論者によれば、パルメニデスを数的一元論者とか実体的一元論者と認定することはできないし、そもそも彼の哲学詩の意義が一定の体系的教義を説くことではなく、彼に続く人々への問題提起という点にまずあったことを考えれば、彼を一元論者か多元論者かと問うことは、パルメニデスの理解においては派生的で二次的な問題にすぎないのである。

最後に第6章として、当初の学びのプログラムで言及されていた「思わく」の学びの意味が改めて考察される。なぜ、虚偽とわかっているものをわざわざ詳細に語る必要があったのか。なぜ、あのプログラムに示されているような回りくどい手続きをとるのか。論者はまず「思わく」とは「現れ」や「現象」ではないこと、それは直接的な知覚経験ではなく、原理の点での「ある」との類似性からしても、世界についての一定の判断・見解であることを確認する。死すべき者たちは、(無批判のうちに)「ある」と認めた万有の原理として対立する二つの形態を区分した。すでにその時点で、還元不能な異質性を世界に導入し、一つの全体としての世界の自同性や均一性、そして連続性や完結性をはじめから否定することになる。それにもかかわらず、彼らはこの判断に基づいて、他方のものにいささかも劣ることなく自己同一性を保ちつつ、他方のものとの対立性も完全に実現している「光」と「夜」をそれら二つの形態に割り振り、そしてこれら二つの原理の下にすべてを二分していく。万有はこれらで充ち、「無」の入り込む余地はない。しかし、真理の観点からすれば、彼らの「ある」はその本性規定を理解していない限りで結局「あらぬ」へと還元される。論者によれば、こうした状況の中で、パルメニデスは、人間たちが自分たちなりの基準に基づいて語る「あるものども」も「あらぬものども」も、その偽りの真実性や必然性の依ってきたところを十分に見て取った上で、完全に一旦遺棄して、「ある」の本性規定に寄り添いながら、真の根拠をもつ言説と判断を改めて構成するように要請しているのである。

「思わく」の排除は、直ちに生成と変化の世界の完全な消去と感覚の全面的否定、そして一切の現象的世界を超越したまったく別の純粋に思惟的な世界の確立へと直結しているわけではない。先に論じられた「思わく」の二重の学びの要請は、「ある」という観点からの「思わく」の解体(存在論的抹消ではない)を命じるとともに、やはり、われわれが生きるこの世界においてもう一度妥当で整合的な自然学説や宇宙論を構築することを求めているものと論者は位置づける。パルメニデスの哲学の本質は、あくまでも根源的な「ある」ということを基盤とする真理探究の方法を確立するということにあり、しかもその方法の実践の場を、感覚と区別された思惟の世界ではなく、むしろそうした区別を前提としないで、まず自分自身が生きているこの世界に求めている。論者によれば、パルメニデスにとっても、説明すべきは依然としてこの世界であり、探究はこの世界においてなされるのである。

論文審査の結果の要旨

パルメニデスは前5世紀前半に活動した初期ギリシア哲学者の一人で、いわゆる「ソクラテス以前の哲学」において、論理的批判の方法をはじめ導入し、その流れに根本的な転機をもたらした人である。長大な叙事詩形式による哲学詩を著し、その主要部分が今日まで伝わっている。論者はそれらの著作断片を精緻に読解分析し、彼の思想の重要な諸点について、従来の多様な解釈を批判的に検討しつつ、独自のパルメニデス像を提示している。

本論文の基本的特色は、できうるかぎりパルメニデスを初期哲学の自然学的展開の中に位置づけ、しかも積極的な役割を与えようとしたところにある。すなわち、従来のパルメニデス理解では、彼の論理優先の立場から当時の世界説明のあり方を根本からくつがえした、自然学否定論者としての側面が強調されてきたが、彼の思想の本旨は、むしろそうした強力な否定的吟味を通して、より真なる世界像のありかを明らかにすることにある、というのが論者の立場である。

特色ある主張の第一は、パルメニデスの認識批判および「探究の道」の基本図式の再検討を通じて、「第三の道」としての「思わく(ドクサ)」による「学び」のある局面に積極的な意義の可能性を開いていることである。主として第2章で、

パルメニデスにおける「ロゴス」の内実を考察し、それは一般に解されるように、「知性」と連動しつつ「感覚」を否定するものではなく、むしろ「知性」も「感覚」もともに誤りうるものであることを前提として、女神に仮託された「ロゴス（言葉）」に立って人間的認識総体を批判するものであり、純粋に「〈ある〉、そして〈あらぬ〉はあらぬ」とする自明の原理に立つことで、人間の思惟と言説の新たな成立を確保しようとするものであることを明らかにしている。また、つづく第3章においては、探究における〈ある〉・〈あらぬ〉の二分法とは別に「第三の道」の可能性を留保することに努める。そのことは直ちに「思わく」を救済するものではないが、第1章において強調されたその「二重の学び」の意味するものと重ね合わせることで、論者は、一面的な知性主義者としてのパルメニデス像を突き崩し、むしろ彼が「思わく」の否定ということ自体を通じて、新たな自然学説への道を開いているものと考えるのである。

他方で論者は、パルメニデス的〈ある〉の道の強固な論理を的確に取り押さえている。まず第1章において、従来の諸説を精査した上で、〈ある〉とは、その主語措定以前の「絶対的用法」として、「存在する」ということ自体の本性を意味することを明らかにしている。第4章では、その観点に立って、〈ある〉の本性開示として最も重要な断片8を周到に分析吟味している。その「生成」否定の議論の独自の構造化、時間的な観点からは「無時間的」な存在に限りなく近接していることの明確化などにおいて、それ自体として評価されている。ただし論者の趣旨においては、パルメニデスの意図は、〈ある〉の絶対性を明示することで世界の構造と意味を否定することではなく、それによってむしろ絶対的存在と自然的世界との差異を明示し、前者を基準として後者について考察するよう促すことにある。また第5章で論じられているように、論者によれば、断片8において「〈ある〉は、全体としてただ一種のもの」とも語っているにせよ、パルメニデスは存在者の唯一性を主張している（すなわち強固な一元論者）のではなく、存在の同一性、均一性を示唆するものでしかない、とされる。

これらの指摘によって論者は、パルメニデスを自然学の否定者と見なす従来の解釈から、彼以降に展開される多元論的自然学説を予示した思想家として評価することへの転換を図る。彼の〈ある〉は、その「唯一性」を緩和すれば、エンペドクレスやアトミストたちの想定する実在先取りしたものにはかならないからである。これは、新しい見取図の中で提出されたその位置づけとして注目に値するものと言ってよからう。

最終の第6章で論じられているように、論者の立場からは、断片8の後半部以降に展開されている「思わくの道」の宇宙論に対して、積極的・肯定的な意味を容易に与えることも、大きなメリットである。論者によれば、その宇宙論は、「思わく」を一旦解体した上で、本来的な〈ある〉への認識を研ぎ澄ませつつ、真なる根拠をもつ言説と判断に立って、再度その構築を目指したものとされる。当初において留保されていた「思わく」の「二重の学び」は、一面においてその虚偽性を精確に吟味することで、自然的世界の真のあり方の探究を促すものにほかならなかったのである。

こうした斬新な議論展開において、しかし、パルメニデスにおける感覚と知性の対立や、「一元論」か「多元論」かの論点などについては、依然として論者による一つの主張に留まっている側面もなしとしない。いくつかの点では、さらなる補強が要請されようし、またパルメニデスが当時の哲学世界に与えた大きなインパクトへの考察や、彼に始まるエレア派と「多元論者」たちとの論争の過程との整合性の吟味などもさらに望まれるところである。とはいえ、難解なテキスト分析を基盤として、すぐれて柔軟な再解釈の中で、新たなパルメニデス像を提出したことの意義は、なお高く評価されるべきものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。